

学会報告

第1回日本在宅医療連合学会大会

常任理事 水谷 匡宏

7月14日より2日間にわたって梅雨空の続く西新宿の京王プラザホテルを主会場に第1回日本在宅医療連合学会大会が開催された。今大会のテーマは「ひとつになる 医療 福祉 介護 行政との協働 連携から統合へ まちづくりに向けて」であった。初日の開会式では森 清 大会長（東大和ホームケアクリニック院長）から、「この新しく開催された学会は日本在宅医学会と日本在宅医療学会が本年5月に合併したことにより、多くの在宅関係者が一つになる機会が生まれた。共生社会を目指すまちづくりからも在宅医療関連学会がますます重要になるであろう。」との挨拶があった。一般演題数は初回にもかかわらず498題にのぼった。またシンポジウム数は54題と多岐にわたり、全国から多数の参加者が会場内を慌しく移動しながら聴講した。

今回、学会の特徴的なプログラムとして在宅医療インテグレーター交流会があった。各自が交流を通して統合のプロセスを検証しようと、全国の在宅関係者が一つのテーマごとにじっくり語り合う場所が設けられた。例えば死別の悲しみに寄り添うグリーフケアやスピリチュアルケアについて、さらには若手多職種交流における問題など在宅の中核をなす話題について約1時間のなかで、その部門のリーダーが司会役になりながら参加者間で熱い議論をかわした。また初日の新学会創立記念では在宅医療は21世紀のイノベーションであるとの視点から講演があった。また特別講演では地域包括ケアシステムの深化に向けた展望－価値共創モデルを用いたチェンジマネジメントのすすめと死を生きるについて、基調講演では2題がエントリーされた。1題目は在宅医療のコアコンピテンシーとプリンシプルについて、2題目は「在宅医療」改め、新時代の臨床技法“proactive approach”の提唱～人を医す中医、地域を医す大医を目指して～についてであった。

その他盛りだくさんの内容と企画ものがなされた。その中で、最も印象深かったのは、在宅医学の

今後の展開について、石垣泰則氏（医療法人悠輝会コーラルクリニック院長）の講演であった。氏によれば本来在宅医療は我が国において古来実践されていた医療であり、国宝である医心方には、一千年以上昔の往診時における医療のあり方、すなわち疾病の診断治療のみならず臨床倫理の重要性や家族に対する配慮の必要性が記載されていた。在宅医学は疾病に関する医学だけでなく患者の人間学あるいは医師の行動学を包括した学問である。今後ダイナミックに変化する医療情勢に翻弄されず、在宅医療を学際的に探求し、医療人を育て、世に発信することが求められると説いた。氏は日本在宅医学会代表理事を長らく歴任され、在宅医療に精通した方である。この2日間を通して大会運営者の在宅部門に関する並々ならぬ熱意と職場意識を強く感じた学会であった。

参加者の一人として新たな本学会の門出を祝うと共にさらなる盛会を期待する次第である。なお、この学会の地域フォーラムの第1回目が札幌市教育文化会館で9月14日から2日間にわたり開催されることが決まっている。また別掲として本学会の活動の目標と目標達成のための活動について記載する。

学会の活動の目標と目標達成のための活動

目標4項目

①在宅で療養するすべての人の尊厳を守り、本人と家族のQOL（人生および生活の質）の向上をはかる ②療養者自らの生き方を尊重し、それを実現するための支援を行う ③質の高い在宅医療の実践を通じて、人生の最終段階も含め、安心して暮らし続けられる地域づくりに貢献する ④生活やいのちを支えるための数智を集約し、新しい在宅医学を創造する

活動12項目

①在宅医療の質の向上をはかる ②在宅医療の普及・啓発をはかる ③在宅医療に関わる専門職の教育・研修・育成をはかる ④在宅医療における医療・介護・福祉の連携を強める ⑤病院医療と在宅医療の協働による継続医療を実現する ⑥在宅医療に関する調査、研究を推進する ⑦災害時における在宅医療支援体制について検討する ⑧国民への在宅医療に関する情報発信、啓発を行う ⑨国の在宅医療政策への提言を行い、地域行政と協働する ⑩在宅医療に関係する団体（学会・研究会・NPO・財団等）との連携をすすめる ⑪在宅医療に関わる情報、研究等において海外との交流を行う ⑫人生のすべての段階における医療のあり方についての検討・啓発を行う